

【調査報告】

島尾敏雄と琉球弧
—— かがしま近代文学館所蔵資料から ——

Toshio Shima and Ryukyuko :
From a document possessed in Kagoshima City
Modern Literature Museum

小 嶋 洋 輔

要旨

本調査報告は、琉球弧における島尾敏雄受容史の構築に向けて、現在残されている関連資料の状況把握を行い、さらにそれを利用した研究の可能性に言及するものである。特にかがしま近代文学館所蔵資料の状況把握は重要な作業といえる。かがしま近代文学館所蔵資料とは、2011年長男島尾伸三氏により文学館のコレクションとして加えられた、自筆原稿や日記などの資料である。2016年3月には『かがしま近代文学館所蔵資料目録 島尾敏雄特別資料目録』が刊行され、資料の全貌を見渡すことができるようになった。そこで本調査報告ではまず、資料のなかで、島尾が生活し、先行研究も多く存在する奄美群島を除いた琉球弧関連資料を洗い出す作業を行った。これら資料の活用の可能性について2, 3の事例を示しつつ言及することが本稿の主眼となる。その上で現時点での結論として、「島＝琉球弧の日本の知識人」という役割に置かれた島尾を中心とした、「場」を再構成し、見直すべきであるという視座を提供する。

島尾敏雄は生誕百年ということで、各地でイベントが開催された。今なお生きた研究対象といえる。とくに那覇市で2017年9月9日に行われたシンポジウムでの議論からは、琉球弧においた今なお島尾敏雄という「場」が影響力を持つことの証明となった。

2016年度から「琉球弧における島尾敏雄受容史の構築」として科学研究費補助金の助成を受けている研究事業のなかにおいて、本調査報告はそのスタートに位置づけられる。

キーワード：日本近代文学研究，地域研究，沖縄研究，作家研究

I. はじめに

本稿は、琉球弧における島尾敏雄受容史の構築に向けて、現在残されている関連資料の状況把握からそれを利用した研究の可能性に言及するものである。

島尾敏雄研究は、島尾の作品が、作家である島尾敏雄の「私」の問題を描くという特徴を有していたために、小説の素材の現実性にとらわれがちであった¹。たとえば『死の棘』論でいえば、その時代性は無視し、島尾が体験した実際の問題が書かれた小説として、「私小説」、「家族小説」として位置付けるものが多い。そうしたなかで花田俊典が残した功績は大きい。花田は「ヤポネシアのはじまりー島尾敏雄の「日本」地図」²で、島尾と

いう存在が60年代の沖縄をめぐる言説空間のなかで、どのような位置にあったかに着目、そのナショナリズムへの対抗姿勢を明示した。島尾という存在を「私」の問題に収斂させるのではなく、広く戦後言説空間に開くという花田の試みは、重要な示唆を与えてくれる。同様の意味で岡本恵徳の仕事も意義深い。岡本は『「ヤポネシア論」の輪郭ー島尾敏雄のまなざし』³のなかで、「ヤポネシア」という島尾の造語の変遷を明らかにする。ひとつの意をもつ用語として扱われがちな「ヤポネシア」が、時代性を有し、島尾とその周りの状況によって変遷する様を見いだした。岡本もまた、島尾という存在が戦後言説空間のなかでどのような「場」を形成していったかを探る重要性を示すのである。

作家＝小説家である「私」の問題を小説に描く、島尾自身の現実の「私」の問題を探ることは、作家のパーソナルヒストリーを紡ぐ作業であると同時に、戦後文学史、戦後史の再構築につながるものといえる。さらにいえば、その「私」が、虚構である小説などの文学作品に投影されるときに生じるズレを探ることからも、文学が担ったものの変遷及び、戦後空間における「私」の変遷に迫ることができる。島尾敏雄とその作品はその重要な事例なのである。

そして、それは島尾が、中央の文壇で名を成した作家として琉球弧に寄り添ったという事実が大きい。とくに「復帰」に揺れる沖縄県の若い「知識人」たちに与えた影響は計り知れない。そして、その言説を村井紀に「南島イデオロギー」の戦後における再生を担ったとポストコロニアリズム的な視点で批判されながらも⁴、琉球弧において島尾の評価は一様に高い。これはなぜなのか。その問いに答えるためには島尾と琉球弧の重なり合いと、それにより形成された「場」がいかなるものであったかを探る必要があるのである。

ではここで島尾敏雄と琉球弧の関係について、年譜⁵から抜粋しておこう。

- ・昭和30年（1955）
10月、国府台病院を（※妻ミホが）退院し奄美大島名瀬市住吉町三班林恒敬方に移住。
- ・昭和39年（1964）
11月、沖縄島、石垣島、宮古島を旅行。
- ・昭和40年（1965）
10月、名瀬市小俣町20番8号に転居。
- ・昭和41年（1966）
3月から4月にかけて、長男伸三とともに沖縄島、伊江島を、伸三と分かれて石垣島、竹富島を旅行。
- ・昭和47年（1972）
『日の移ろい』を「小説内の日記とは約二ヶ月遅れ」で連載開始。
- ・昭和49年（1974）
この年4回沖縄県に旅行。
- ・昭和50年（1975）
1月、妻ミホと沖縄県旅行
4月、鹿児島県立図書館奄美分館長を辞職し、鹿児島

県指宿市西方1408番地に転居。同月、鹿児島純心女子短大教授になり、文学担当、同学園図書館長兼務。

※この年から夏は新沖縄文学賞選考委員のため、冬は避寒のため沖縄県に滞在

ここでとくに気になるのが、島尾の「沖縄県」へのコミットである。島尾は旅行、長期滞在などのかたちで「沖縄県」を訪れ、新川明、岡本恵徳、川満信一ら若き「知識人」と交流を深めている。

そこで本稿は、琉球弧における島尾敏雄受容史の構築に向けて、そのスタートとして現在残されている島尾関連資料における琉球弧の位置について状況把握を行うものとなる。特にかごしま近代文学館所蔵資料の調査分析は重要な作業といえる。そこには、自筆による沖縄旅行記や、琉球文学に関する講義ノート、「沖縄県」の「知識人」からの島尾宛書簡などが残されている。

II. かごしま近代文学館所蔵資料について

かごしま近代文学館所蔵資料とは何か。『かごしま近代文学館所蔵資料目録 島尾敏雄特別資料目録』（以下『目録』）⁶の「はじめに」に資料に関する詳細な説明がある。

島尾敏雄没後、自筆原稿や日記などの遺品は、島尾ミホ夫人が、二人が最も長く過ごした奄美大島の地で大切に保管しておられました。そのミホ夫人も2007（平成19）年に87歳で亡くなると、これらの資料は長男の島尾伸三氏に引き継がれました。そして2011（平成23）年、伸三氏の計らいにより、これらの膨大な資料はかごしま近代文学館のコレクションに加えられることになりました。（p. 3）

そして、『目録』では、この「膨大な資料」（15,150点）が「原稿」1,558点、「自筆資料」629点、「書簡」11,314点、「書画」29点、「印刷物」377点、「視聴覚資料」287点、「遺品」956点と分類されている。本稿では、この『目録』からとくに「沖縄県」に関連した資料を年代順に抜き出し、そのタイトルからでも島尾敏雄と「沖縄県」の連関について目に見えるものにするところから始めたい。

表1. 原稿（総数91）

※沖縄に関する内容もしくは沖縄のメディアに掲載されたものを抽出した。
※※随筆・解説・文学賞選評・講義原稿（『琉球文学論』）、座談草稿コピー（『新沖縄文学』の幻の座談会）及び手入校正刷稿含む。
※※※内容が奄美大島での暮らしや事象に限定されるものは外した。
※※※「戦記」的な著作は外した（ただし石垣島事件に関するものは入れている）。

	初出年月日	資料名	初出	数量・備考
1	1954・10	手入校正刷：「沖縄」の意味するもの	おきなわ	
2	1956・1・6	手入校正刷：南西の列島の事など	朝日新聞	

	初出年月日	資料名	初 出	数量・備考
3	1958・1・8	手入校正刷：われわれのなかの南	南日本新聞	
4	1958・1・12	手入校正刷：南島が持つカートクナガ・ヨシノブ氏の繪を見て	南海日日新聞	
5	1959・3	草稿：沖縄らしさ	三田文学	
6	1959・3	手入校正刷：沖縄らしさ	三田文学	
7	1959・6・20	草稿：南島への招待	南日本新聞	
8	1959・7・10	草稿：ニライ・カナイ	南日本新聞	
9	1959・5・10, 5・30, 6・10, 6・20, 6・30, 7・10	手入校正刷：南島について思うこと	南日本新聞	
10	1960・1・1	草稿：〔悲しき南島地帯〕	南海日日新聞	
11	1961・12	草稿：ヤポネシアの根子〔ヤポネシアの根っ子〕	『世界教養全集』第21巻 月報15	原稿用紙3枚(冒頭)
12	1961・12	草稿：〔ヤポネシアの根っ子〕〔冒頭：ひとつの小さな～〕	『世界教養全集』第21巻 月報15	原稿用紙3枚(冒頭)
13	1961・12	草稿：〔ヤポネシアの根っ子〕〔冒頭：私は偶然の～〕	『世界教養全集』第21巻 月報15	原稿用紙2枚(断片)
14	1963・3	草稿：離れに暮して	かごしま	ヨーゼフ・クライナーのこと
15	1965・1・1	草稿：初めて沖縄・先島を旅して〔沖縄・先島の旅〕	南日本新聞	
16	1965・1・8	草稿：奄美・沖縄・本土④	朝日新聞	
17	1965・1・9	草稿：奄美・沖縄・本土⑤	朝日新聞	
18	1965・3・4	草稿：奄美と沖縄と	沖縄タイムス	
19	1966・2	草稿：名瀬の沖縄芝居	共同通信	
20	1966・8	草稿：沖縄紀行	展望	
21	1967・8・4, 5, 7	草稿：大城立裕氏芥川賞受賞の事	沖縄タイムス	
22	1967・8・17	草稿：明治百年に当たってー日本にとって鹿児島は何かー〔琉球弧を目の中にー明治百年と鹿児島〕	南日本新聞	
23	1969・2・12	草稿：沖縄は私にとって何か〔私にとって沖縄とは何か〕	琉球新報	
24	1969・2・20	草稿：〔「琉球弧の視点から」〕後書	『琉球弧の視点から』	
25	1970・5・9	草稿：沖縄島の城跡	読売新聞夕刊	
26	1970・6	草稿：〔琉球弧に新たな照明を〕	『日本庶民生活史料集成2』内容見本	
27	1970・10・5	草稿：「さまよへる琉球人」をよんだあとで〔琉球の覚めた日〕	朝日新聞夕刊	
28	1971・10	草稿：講演要旨〔ヤポネシアの思想と文化の創造〕	「湯布院スコーレ大学」 テキストブック	
29	1971・11	草稿：ヤポネシアの南	田中真人『星への歩み』	
30	1973・12	草稿：〔新川明の事〕	新川明『異族と天皇の国家』	
31	1974・7・12	草稿：沖縄に感ずー琉球弧にてー〔琉球弧の吸引力的魅力〕	アサヒグラフ	
32	1975・1・25	草稿：⑥伊江島タッチュー	朝日新聞夕刊	「日記から」というエッセイ
33	1975・1・27	草稿：⑦伊平屋島	朝日新聞夕刊	「日記から」というエッセイ
34	1975・2・1	草稿：⑩沖縄芝居	朝日新聞夕刊	「日記から」というエッセイ

	初出年月日	資料名	初 出	数量・備考
35	1975・2・1	草稿：②沖縄芝居	朝日新聞夕刊	「日記から」というエッセイ
36	1976・9・25	草稿：『南島通信』後書	『南島通信』	
37	1977・1	草稿：新沖縄文学賞②選後評	新沖縄文学	
38	1977・9	草稿：南島歌謡集成推薦文	『南島歌謡大成』内容見本	
39	1977・10	草稿：琉球文学事始め	純心女子短期大学同窓会会報「ゆかり」	
40	1977・12	草稿：川満信一詩集略注	『川満信一詩集』	
41	1978・1	草稿：第三回新沖縄文学賞選後評	新沖縄文学	
42	1978・2・5	草稿：那覇へ	沖縄タイムス	
43	1978・2・12	草稿：ラビリンス	沖縄タイムス	
44	1978・2・19	草稿：大道界限	沖縄タイムス	
45	1978・2・26	草稿：白い家	沖縄タイムス	
46	1978・2	草稿：那覇に越冬す	ZENON	
47	1978・3・5	草稿：真嘉比道	沖縄タイムス	
48	1978・3・12	草稿：墓山	沖縄タイムス	
49	1978・3・19	草稿：沖縄芝居（上）	沖縄タイムス	
50	1978・3・23	草稿：那覇に仮寓して	毎日新聞夕刊	7枚
51	1978・3・23	草稿：那覇に仮寓して	毎日新聞夕刊	15枚
52	1978・3・26	草稿：沖縄芝居（つづき）	沖縄タイムス	
53	1978・3・27	草稿：那覇から①〔那覇からの便り1〕	東京新聞夕刊	
54	1978・4・2	草稿：座喜味城址	沖縄タイムス	
55	1978・4・16	草稿：二つの記録映画	沖縄タイムス	
56	1978・4・24	草稿：那覇から②〔那覇からの便り2〕	東京新聞夕刊	
57	1978・5・23	草稿：那覇から③〔那覇からの便り3〕	東京新聞夕刊	
58	1978・6	草稿：新川明跋〔新川明との出会い〕	新川明『新南島風土記』	
59	1978・10	草稿：風の怯えと那覇への逃れ	ミセス	
60	1979・1	草稿：新沖縄文学賞選評〔第4回〕	新沖縄文学	
61	1979・8	原稿：谷川健一様〔谷川健一氏への返書〕	すばる	原稿用紙2枚
62	1979・8	草稿：谷川健一氏への返信〔谷川健一氏への返書〕	すばる	原稿用紙3枚
63	1980・4	草稿：下地島の通り池	ゼノン	
64	1980・6	草稿：〔仲宗根政善「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」推薦文〕①	仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』パンフレット	
65	1980・6	草稿：〔仲宗根政善「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」推薦文〕②	仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』パンフレット	
66	1980・12・30	草稿：（新沖文賞）選後感〔新沖縄文学賞選評第11回〕	新沖縄文学	
67	1981・1	草稿：〔東峰夫「大きな鳩の影」推薦文〕	東峰夫『大きな鳩の影』	
68	1981・3	草稿：〔新沖縄文学賞選評（第6回）〕	新沖縄文学	
69	1981・4	草稿：沖縄歌謡六点選釈	きものと装い	
70	1981・4	原稿コピー：〔沖縄歌謡選釈〕	きものと装い	
71	1981・5・16	草稿：南島について（純心講座レジメ）	鹿児島純心女子短期大学「第3回純大講座」レジメ	
72	1981・11	草稿：日本の南の島々	『美しい日本12 沖縄・小笠原の自然』	
73	1981・12	草稿：新沖縄文学賞 候補作の読後感	新沖縄文学	

	初出年月日	資料名	初 出	数量・備考
74	1982・10	草稿：沖縄大百科事典（推薦文）〔『沖縄大百科事典』推薦文〕	『沖縄大百科事典』パンフレット	
75	1983・7	草稿：迷路の那覇	海燕	
76	1985・8	草稿：「石垣島事件」補遺〔①〕	別冊潮	
77	1985・8	草稿：「石垣島事件」補遺〔②〕	別冊潮	
78	1985・9	草稿：安里川遡行〔①〕	海燕	
79	1985・9	草稿：安里川遡行〔②〕	海燕	社用原稿用紙1枚（タイトルのみ）
80	1987・3・31	草稿コピー：座談会「琉球弧とヤポネシア」〔“玄”の座談会「琉球弧とヤポネシア」〕	新沖縄文学	岡本恵徳/新川明/川満信一/島尾敏雄
81	未詳	草稿：奄美に於ける沖縄		執筆時期：1956・7・30
82	未詳	草稿：新沖縄文学賞選評		
83	1970?	原稿：第一章 なぜ琉球文学か		多摩美術大学での講義ノート
84	1970?	原稿：〔第二章〕〔冒頭：琉球文学とは、琉球～〕		
85	1970?	草稿：〔第一章 注記〕		
86	1970?	草稿：〔第二章 注記〕		
87	1970?	草稿：タイトル不明〔冒頭：琉球文学の特色を～〕		
88	1970?	草稿：タイトル不明〔冒頭：琉球文学が歌謡性が～〕		
89	1970?	草稿：タイトル不明〔冒頭：沖縄とか奄美を含めて～〕		
90	1970?	草稿：オモロ		
91	1970?	草稿：琉球の劇文学		

表1には、草稿、手入校正稿などをまとめた。91点となる。草稿類がこれだけの量（1,558点）で残存している作家は大変珍しく、その成果は、安達原達晴の一連の仕事にすでにあらわれているが、まだその端緒についたばかりといえる⁷。また、表示した「沖縄県」に関する草稿類も1976年に多摩美術大学で行った集中講義の講義ノートが末次智らの手によって整理され、島尾敏雄『琉球文学論』⁸として、生誕百年にあたる2017年刊行された。

これらの資料は現在、かごしま近代文学館を訪れ、撮影を行うことで収集している。ここに表示したような琉球弧に関するエッセイの草稿と初出稿、そして全集版で

どのような変化が生じているかを探る作業は重要である。とくに、死の前年である1985年『海燕』9月号に掲載された「安里川遡行」の草稿の存在は興味深い。「安里川遡行」は、小説としても分類できるような文章であるが、その草稿には多数の「朱」が入れられている。本作は沖縄島南部、那覇近郊を流れる安里川の源流を島尾が辿る紀行文的文章であり、この草稿と校正後の初出稿の文言を比較することで、島尾が沖縄島のイメージをどのように生成していったかを探ることができる。別稿をもって詳細に論じたい。

表2. 原稿（『日の移ろい』）関連（総数 63）

	初出年月日	資料名	初 出	数 量
1	1972・6	草稿：日の移ろい	海	
2	1972・7	草稿：日の移ろい②	海	
3	1972・8	草稿：日の移ろい（三）	海	
4	1972・9	草稿：日の移ろい（四）	海	
5	1972・9	草稿：日の移ろい④	海	原稿用紙1枚（タイトルのみ）

	初出年月日	資料名	初 出	数 量
6	1972・11	草稿：日の移ろい（五）	海	
7	1972・11	草稿：日の移ろい⑤	海	原稿用紙1枚（タイトルのみ）
8	1972・12	草稿：〔日の移ろい（六）〕	海	
9	1972・7, 8, 12	草稿：続（ママ）日の移ろい②③⑥	海	原稿用紙1枚（タイトルのみ）
10	1973・1	草稿：〔日の移ろい（七）〕	海	
11	1973・1	草稿：日の移ろい⑦	海	原稿用紙1枚（タイトルのみ）
12	1973・2	草稿：〔日の移ろい（八）〕	海	
13	1973・3	草稿：〔日の移ろい（九）〕	海	
14	1973・3	草稿：妻の見てきた屠殺場の話〔日の移ろい〕	海	原稿用紙4枚
15	1973・4	草稿：日の移ろい（十）	海	
16	1974・4	草稿：日の移ろい（十一）	海	
17	1974・5	草稿：日の移ろい（十二）	海	
18	1974・6	草稿：日の移ろい（十三）	海	
19	1974・7	草稿：日の移ろい（十四）	海	
20	1974・8	草稿：日の移ろい（十五）	海	
21	1974・9	草稿：日の移ろい（十六）	海	
22	1975・9	草稿：日の移ろい（24）	海	
23	1975・10	草稿：日の移ろい（25）	海	
24	1975・11	草稿：日の移ろい（26）	海	
25	1976・1	草稿：日の移ろい（27）	海	
26	1976・3	草稿：日の移ろい（29）	海	
27	1976・4	草稿：日の移ろい（30）	海	
28	1976・5	草稿：日の移ろい（31）	海	
29	1976・6	草稿：日の移ろい（32）	海	
30	1976・8	草稿：日の移ろい（34）	海	
31	1976・9	草稿：日の移ろい（35）	海	
32	1976・11・30	草稿：「日の移ろい」あとがき	『日の移ろい』	
33	1977・1	草稿：〔続〕日の移ろい（1）	海	原稿用紙2枚（断片）
34	1977・1	草稿：〔続〕日の移ろい（1）〕	海	原稿用紙1枚（断片）
35	1977・1	草稿：〔続〕日の移ろい（1）〕	海	原稿用紙1枚（断片）
36	1977・2	草稿：〔続〕日の移ろい②〔冒頭：私が見た夢。～〕	海	原稿用紙1枚（冒頭）
37	1978・9	草稿：〔続〕日の移ろい⑪	海	
38	1978・10	草稿：〔続〕日の移ろい⑫	海	
39	1978・11	草稿：〔続〕日の移ろい（13）	海	
40	1978・12	草稿：〔続〕日の移ろい（14）	海	
41	1979・2	草稿：〔続〕日の移ろい⑮	海	
42	1979・3	草稿：〔続〕日の移ろい⑯	海	
43	1979・5	草稿：続 日の移ろい⑰	海	目録には「続」の表記なし
44	1979・8	草稿：続 日の移ろい（18）	海	
45	1979・10	草稿：〔続〕日の移ろい（19）	海	原稿用紙15枚
46	1979・10	草稿：〔続〕日の移ろい（19）〕	海	原稿用紙16枚
47	1979・12	草稿：〔続〕日の移ろい（20）	海	原稿用紙13枚

	初出年月日	資料名	初 出	数 量
48	1979・12	草稿：〔続 日の移ろい (20)〕	海	原稿用紙14枚
49	1980・1	草稿：〔続〕日の移ろい②	海	
50	1980・2	草稿：〔続〕日の移ろい (22)	海	原稿用紙14枚
51	1980・2	草稿：〔続 日の移ろい (22)〕	海	原稿用紙14枚
52	1980・3	草稿：〔続 日の移ろい (23)〕	海	原稿用紙11枚
53	1980・3	草稿：〔続 日の移ろい (23)〕	海	原稿用紙 7 枚
54	1980・3	草稿：〔続 日の移ろい (23)〕	海	原稿用紙16枚
55	1980・3	草稿：〔続〕日の移ろい (二十三)	海	原稿用紙 8 枚 執筆が 上 3 つより遅い (注)
56	1980・5	草稿：〔続〕日の移ろい (24)	海	原稿用紙11枚
57	1980・5	草稿：〔続 日の移ろい (24)〕	海	原稿用紙12枚
58	1980・9	草稿：〔続〕日の移ろい (25)	海	
59	1980・10	草稿：〔続〕日の移ろい⑥	海	
60	1981・11	草稿：〔続〕日の移ろい⑦	海	
61	1981・12	草稿：〔続〕日の移ろい (28)	海	
62	1982・1	草稿：〔続〕日の移ろい (29)	海	
63	1982・2	草稿：〔続〕日の移ろい (30)	海	

表2は1972年、73年の島尾の奄美での生活を、日記として描いた小説『日の移ろい』『続日の移ろい』の草稿を、表1のエッセイ類とは分けて示した。同じ回の書き直し草稿が多数あるなど単純にはいえないが、全81回の連載の内63点の草稿が残っていることになる。沖縄県の本土「復帰」の年の島尾の生活を描いた『日の移ろい』は、島尾と琉球弧の問題を考える上で重要な作品なのであるが、さらにこれら草稿の存在から、琉球弧の問題を

虚構化する、その細かな動きまで見て取ることができるようになった。そして表3の自筆資料にある『日の移ろい』に描かれた時期の、日記、旅行記の存在からとあわせることで、作家である「私」を書く小説の考察にもつながってゆく。実際の日記と日記として描いた『日の移ろい』には明らかなずれが生じている。このことについてはあとで事例をあげつつ論じたい。

表3 自筆資料 (総数 26)

	作成年 (西暦)	資料名	数 量	備 考
1	1964	日記帳：沖縄旅行	日記帳 1 冊	
2	1965・9・4より	日記帳：日記 (昭和40年9月4日～昭和41年12月31日)	ノート 1 冊	1966年の沖縄旅行にかかる日記
3	1966・2・11より	手帳：文藝手帳 1966	手帳 1 冊	1966年の沖縄旅行にかかる手帳
4	1966・3・28より	取材ノート：沖縄・先島旅行	ノート 1 冊	
5	1970・3	ノート：沖縄Ⅲ (昭和45年3月)	ノート 1 冊	
6	1970・10・25より	日記帳：日記抜粋 3 (昭和45年10月25日～昭和48年3月31日)	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
7	1971・1・8	日記帳：日記 (昭和46年1月8日～2月19日, 昭和47年1月16日～11月28日)	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
8	1972・7・24	日記帳：日記 (昭和47年7月24日～11月13日)	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
9	1972・11・23	日記帳：日記 (昭和47年11月23日～昭和48年3月23日)	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
10	1972	手帳：文藝手帳 1972	手帳 1 冊	『日の移ろい』関連
11	1972	手帳：BOOKS DIARY 1972	手帳 1 冊	『日の移ろい』関連
12	1973	手帳：文藝手帳 1973	手帳 1 冊	『日の移ろい』関連

	作成年（西暦）	資料名	数 量	備 考
13	1973	手帳：BOOKS DIARY 1973	手帳 1 冊	『日の移ろい』関連
14	1973・3・6より	ノート：琉球文学史②〔講義ノート〕（純心短大）	ノート 1 冊	
15	1973・3・24	日記帳：日記（昭和48年3月24日～5月26日）	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
16	1973・4・1より	日記帳：日記抜粋4（昭和48年4月1日～昭和49年3月15日）	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
17	1973・6・8	日記帳：日記（昭和48年6月8日～7月31日）	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
18	1973・8・21	日記帳：日記（昭和48年8月21日～11月4日）	ノート 1 冊	『日の移ろい』関連
19	1973・11・15	日記帳：日記（昭和48年11月15日～昭和49年4月19日）	ノート 1 冊	
20	1977・12・22より	日記帳：那覇日記（昭和52年12月22日～昭和53年4月24日）	日記帳 1 冊	
21	1980・2・23より	日記帳：那覇日記（昭和55年2月23日～3月16日）	日記帳 1 冊	
22	1981・2・1より	日記帳：那覇日記（昭和56年2月1日～3月9日）	日記帳 1 冊	
23	1983・1・29より	日記帳：那覇日記（昭和58年1月29日～2月24日）	日記帳 1 冊	
24	1976・4・15より	ノート：琉球文学〈B〉③〔講義ノート〕（多摩美大ほか）	ノート 1 冊	
25	1981・2・1より (推定)	ノート：那覇日記（2月1日～3月2日分）	ノート 1 冊	出納帳
26	未詳	ノート：琉球文学	ノート 1 冊	

表3の自筆資料は、上記『日の移ろい』関連のものも含めて、「沖縄県」関連の日記、旅行記、講義ノート類が26点ある。なかでも奄美大島での生活を終えたのちの、島尾の那覇滞在日記があることも指摘しておきたい。1970年代後半から1980年代にかけての島尾と琉球弧の関

連について見直す作業は、それほど行われていない。「琉球弧」、「ヤポネシア」といった島尾が提示した概念が、島尾の実生活における琉球弧においてはどのように帰結したのか、それを見る格好の資料となろう。

表4 書簡（島尾敏雄宛 総数 101）

※「＊」を付したのは、沖縄県関連の人物と推察されるがまだ特定できていない人物である。

	作成年月	作者名	数 量
1	1955・8・16	霜多正次	便箋 1 枚
2	1955・8・23	霜多正次	葉書 1 通
3	1955・9・14	霜多正次	葉書 1 通
4	1961・9・20	新川明	絵葉書 1 通
5	1962・6・15	ヨーゼフ・クライナー	便箋 2 枚
6	1962・10・21	ヨーゼフ・クライナー	便箋 3 枚
7	1963・2・28	ヨーゼフ・クライナー	絵葉書 1 通
8	1963・3・26	ヨーゼフ・クライナー	封書 1 通
9	1963・3・26	ヨーゼフ・クライナー	便箋 2 枚
10	1964・4・22	新川明	社用箋12枚
11	1964・5・24	ヨーゼフ・クライナー	絵葉書 1 通
12	1964・7・5	ヨーゼフ・クライナー	便箋 2 枚
13	1964・7・25	新川明	葉書 1 通
14	1964・10・27	ヨーゼフ・クライナー	郵便書簡 1 通
15	1965・1・1	琉球大学民族研究クラブ	葉書 1 通
16	1965・1・1	宮城健/平良恵仁＊	葉書 1 通
17	1965・1・1	仲松弥秀	葉書 1 通

	作成年月	作者名	数 量
18	1965・1・1	喜舎場順	葉書1通
19	1965・1・1	伊礼孝*	葉書1通
20	1965・1・1	國仲寛照	葉書1通
21	1965・1・8	大城宗清	葉書1通
22	1965・1・13	国吉真永*	葉書1通
23	1965・1・20	宮城信勇	葉書1通
24	1965・3・12	喜屋武眞栄*	葉書1通
25	1965・4・19	琉球大学沖縄文化研究所	葉書1通
26	1965	安里積千代*	葉書1通
27	1965	新川明	葉書1通
28	1965	國仲穂水*	葉書1通
29	1965・2・22	ヨーゼフ・クライナー	郵便書簡1通
30	1965・4・4	ヨーゼフ・クライナー	郵便書簡1通
31	1965・9・7	ヨーゼフ・クライナー	絵葉書1通
32	1965・10・25	ヨーゼフ・クライナー /アレキサンダー・スラヴィク	カード1枚
33	1965	比嘉加津夫	原稿用紙1枚
34	1966・1・27	ヨーゼフ・クライナー	便箋2枚
35	1966・2・4	ヨーゼフ・クライナー	葉書1通
36	1966・3・16	ヨーゼフ・クライナー	郵便書簡1通
37	1966・5・11	新川明	葉書1通
38	1966・5・19	新川明	葉書1通
39	1966・7・15	ヨーゼフ・クライナー	紙1枚
40	1966・9・3	ヨーゼフ・クライナー	葉書1通
41	1967・1・1	安仁屋賢精/安仁屋佳江*	葉書1通
42	1967・1・1	新川恵子/新川千之	葉書1通
43	1967・1・1	伊是名謙志/伊是名とし子	葉書1通
44	1967・1・1	糸満盛信	葉書1通
45	1967・1・1	岡本恵徳/岡本妙子/亜紀	葉書1通
46	1967・1・1	垣花浩コトブキ	葉書1通
47	1967・1・1	國仲寛照	葉書1通
48	1967・1・1	國仲穂水*	葉書1通
49	1967・1・1	新城安善*	葉書1通
50	1967・1・1	知念榮喜*	葉書1通
51	1967・1・1	仲宗根政善	葉書1通
52	1967・1・1	仲松弥秀	葉書1通
53	1967・1・1	外間守善	葉書1通
54	1967・5・12	ヨーゼフ・クライナー	便箋3枚
55	1967・9・26	ヨーゼフ・クライナー	封書1通
56	1967	新川明	葉書1通
57	1967	川満信一	葉書1通
58	1967	宮良高弘*	葉書1通
59	1968・1・1	新川明	葉書1通
60	1968・1・1	岡本恵徳/岡本妙子	葉書1通
61	1968・1・1	國仲穂水*	葉書1通

	作成年月	作者名	数 量
62	1968・1・1	仲宗根政善	葉書 1 通
63	1968・1・1	仲松弥秀/仲松恵伊子	葉書 1 通
64	1968・1・1	新城安善*	葉書 1 通
65	1968・1・1	比嘉一雄*	葉書 1 通
66	1968・1・1	山城漢榮*	葉書 1 通
67	1968・1・30	上江洲均	葉書 1 通
68	1968・11・8	國仲寛照	葉書 1 通
69	1968	山内盛彬	葉書 1 通
70	1969・3・29	大城立裕	便箋 3 枚
71	1969・4・3	川満信一	葉書 1 通
72	1969・4・5	ヨーゼフ・クライナー	便箋 3 枚
73	1969・6・2	新川明	葉書 1 通
74	1970・6・15	新川明	葉書 1 通
75	1970・8・20	新川明	社用箋 4 枚
76	1970・12・18	新川明	社用箋 7 枚
77	1971・1・18	比嘉加津夫	葉書 1 通
78	1971・5・16	新川明	原稿用紙 3 枚
79	1971・12・25	新川明	社用箋 4 枚
80	1971	新川明	葉書 1 通
81	1973・1・19	新川明	社用原稿用紙 2 枚
82	1973・5・24	外間守善	便箋 3 枚
83	1973・8・1	ヨーゼフ・クライナー	葉書 1 通
84	1973・9・3	新里金福	紙 1 枚
85	1973・10・4	新川明	便箋 8 枚
86	1973・12・12	大城立裕	役所用箋 1 枚
87	1974・3・28	新川明	社用原稿用紙 2 枚
88	1974・9・1	新川明	社用原稿用紙 5 枚
89	1974・10・24	中里友豪	原稿用紙 2 枚
90	1976・11・8	ヨーゼフ・クライナー	コピー 3 枚
91	1976・12・2	新里金福	便箋 2 枚
92	1977・1・1	ヨーゼフ・クライナー /クライナー・弘美/智恵	絵葉書 1 通
93	1977・9・21	赤嶺誠紀	便箋 3 枚
94	1977・10・11	ヨーゼフ・クライナー	便箋 2 枚
95	1977・11・1	川満信一	社用原稿用紙 4 枚
96	1977・11・7	岡本恵徳	便箋 4 枚
97	1978・5・18	岡本恵徳	便箋 4 枚
98	1978・5・20	阿嘉誠一郎	便箋 2 枚
99	1978・6・18	外間守善	便箋 3 枚
100	1979・6・10	新川明	葉書 1 通
101	7 月31日	ヨーゼフ・クライナー	便箋 2 枚

表4で示した書簡類は、作者名の欄に「*」で示したように未詳の人名も多数あるが、沖縄姓と思われる人物からの書簡を含めて、「沖縄県」関連の書簡として101通

抽出できた。とくに注目すべきは、24通の書簡が残るヨーゼフ・クライナーの存在である。オーストリア出身のこの民族学者、日本研究者は、1960年代から琉球弧をフィー

ルドとし、島尾とも交流があったことは、島尾のエッセイなどからもわかっていて、だが、こうした書簡の存在からはさらにその交流の密接さが伝わってくる。書簡の詳細にはヨーゼフ・クライナー本人の許可を得ていないためここでは触れられないが、ヨーゼフ・クライナーと島尾という関係性で琉球弧をとらえなおす必要もあろう。

新川明、岡本恵徳、川満信一ら、「沖縄の若き知識人」との交流のあとも、残された書簡類からは見て取れる。その交流の結実として、「幻」の座談会『琉球弧とヤポネシア』⁹はある。1978年に行われたこの座談会に向かう島尾と彼らとの交流の深さがこれらの書簡から改めて理解できるのである。

また『沖縄タイムス』記者、『新沖縄文学』編集としての新川明から島尾に対する依頼からは、「沖縄県」が島尾に何を求めているかを垣間見ることができる。そして逆に、新川らに対し島尾が依頼した沖縄で出版された書物の購入依頼からは、島尾がどの時期に、「沖縄県」の何に興味を持っていたかを理解することができる。この二点については次節で、新川の島尾宛書簡を引用しつつ考察してみたい。

Ⅲ.「島＝琉球弧の日本の知識人」として

「島＝琉球弧の日本の知識人」という肩書きという言葉で島尾を表象しようというのが本研究の姿勢であるが、わかりにくいものであることは否めない。だが、琉球弧における島尾の立ち位置を一言で表象するのは困難といえる。見方を変えれば、島尾敏雄という存在は別なものとして映る。少なくとも本研究では、「島＝琉球弧の日本の知識人」という肩書きを、「島＝琉球弧」の側に立ち、それを代表することになった、日本＝中央から来た知識人という意味でとらえたい。だがこの意味に限定しても、島尾は日本＝中央を代表する知識人であるからこそ、「島＝琉球弧」を代表する役割を得た、もしくは求められたところもあるように思う。さらに「求められる」という意味では、日本＝中央からもその役割を求められたところもあり、その求められ方の内実にも微妙に差が生じていると思われる。

琉球弧における島尾は、ひとりの作家という意味を越え、まさしく「場」として機能していたといえる。だが、その「場」の中心たる島尾という作家自体が、書く「私」にこだわり続けた作家だということが、この「場」の問題をみえにくくする。というのも小説の主人公や登場人物たる「私」と島尾が近いので、島尾が書いた小説や随筆、そして対談等での発言が、「場」の聖典と化してしまっているからである。

本稿は「調査報告」であるので、上記のような問題を

論じることはその範疇を超えている。別稿で扱いたい。ここでは、前節の最後で指摘した、『沖縄タイムス』記者であり、『新沖縄文学』編集者であった新川明からの、その立場の上での島尾に対する依頼書簡を例示することで、島尾の琉球弧における位置の一端を紹介したい。

1964年4月22日に新川明から島尾敏雄に送られた書簡には、「前にお願ひしましたように御原稿をいただきたく思ったから」とあり、その依頼内容が以下引用するように詳しく書かれている。その依頼は内容から2種に分類できる。それぞれ引用する。

さし当って考えていますのは、四・二八海上集会に触れて、奄美大島におられる文学者の立場からの雑感といったものがほしいのですが……／その中で、こうした政治的な事柄に対して文化人の果たすべき役割などについても触れていただければ幸いです。

そこで、もう一つの願ひは、東京から遠く離れた奄美で、独自の文学を深く掘り下げ、いささかの衰えや停滞をみせるどころか、ますます冴えた世界を創り上げてゆく島尾様に、離島にあっての文学創造の困難さ、(若しそれがあつて)、あるいは離島で文学創造をする者としての心境、そうした地理的条件と文学創造の関係についてのお考えなど、文明批評風にまとめていただければと思います。

とくに2点目の依頼は、新川が当時抱いていた「沖縄のような状況の先鋭化した場所では、文学そのものも、多(不明字－引用者補足)分に政治主義的な方向、色彩を盛(不明字－引用者補足)り込ませることに一つの現状打開の手がかりを得たい」という感覚に基づくものとされる。そのうえで新川は、この考えが「邪道」、「文学の自律性を犯すもの」とし、独自の道を進む文学者島尾敏雄に配慮しつつ、依頼していることは興味深い。なぜならそれは端的に言って、新川においても島尾という存在が、「政治と文学」の問題を語るに適した作家ではないと認識されていたといえるからである。だが同時に、そうであっても奄美在の島尾には、「離島にあっての文学創造の困難さ」といったテーマを「文明批評風」にまとめた文章を依頼する。そうした島尾という存在を見直す必要があると、こうした依頼書簡は示してくれているといえる。

しかも、膨大な著作群の中で管見に入るかぎりであるが、この新川の依頼に島尾は応えていないようである。このあたりの状況に関しては、同年7月25日に新川明から送られた葉書が、かごしま近代文学館には残されているのでその調査を急ぐことにしたい¹⁰。

また新川明からの島尾宛書簡には、書物のやりとりの記録も残されている。1973年1月19日の書簡である。

過日は「大島私考」をお送り頂きありがとうございました。／前に頼まれました「比嘉春潮全集」、外間守善「うりずんの島」、阿波根朝松「沖縄文化史」はそのまま手元に保存してありますが、近い将来、御来沖のご予定がなければ、小包でお送りしますので、御一報下さい。なお、昨年暮、八重山出身の宮城文さんという八十歳余の方が「八重山生活誌」の大冊を私費出版しましたので、これ●（潰し字ー引用者注）は私から贈呈すべく確保してあります。

こうした書簡は外にもあり、新川以外の人間の書簡にも書物のやりとりは残っている。このような資料からは、島尾がどの時期に、琉球弧の何に興味を抱いていたかを知ることができる。さらなる調査が必要である。

IV. おわりにー『日の移ろい』、『続日の移ろい』論への可能性

最後に、結論に代えて、かごしま近代文学館所蔵資料から、島尾作品の新たな解釈を提示できる問題について言及する。それは『日の移ろい』、『続日の移ろい』¹¹という小説に関する問題である。この小説はシマオとされる「私」の日記からなり、その日記に描かれる日常は、島尾の奄美大島での1972年4月1日から1973年11月1日までの生活に重なるものである¹²。

現実を多分に取り込んだ小説であるため、先に表示したように本作品に関わる自筆資料、すなわち日記や手帳へのメモが11点ほど残されている。その詳細を書くなれば、文藝手帳2冊、「BOOKS DIARY」2冊、ノートに記された日記が7冊である¹³。

さらに所蔵資料には草稿があり、さらには初出稿、単行本化、全集収載時の手直しのことを考えると、この二作の「私」に現実から虚構に向けていくつかのバリエーションがあることが理解される。現実に近い、遠いと表現するならば、「私」と現実との距離に遠近があり、それがこの「日の移ろい」「続日の移ろい」を読む際に重要な因子になるといいかけてもよい。また同時期に島尾には「夢日記」も記しており、その記述とも本二作はあわせて読む必要があることも付言しておこう。

こうした「私」と現実との遠近をはかる作業は膨大で、現在その端緒についたばかりである。本調査報告では『日の移ろい』の冒頭に近い、「四月三日」について例示するにとどめる。だが、この遠近は島尾と琉球弧の問題を探る上でも重要となる。琉球弧について島尾が書き足し

たこと、あるいは書かなかったことがみえてくるからである。

・『日の移ろい』（『島尾敏雄全集』第10巻、（晶文社1981・7）、p.10

寒さがとれない。小雨。図書館で机の上を片づけた。雑多な資料や、読もうと思った書物がすぐうずたかく重なって机面がうまってしまう。それを整理しながらすこしずつ片づけて行くことはたのしい作業だ。ひとつには捨てる行為がともなうから。身のまわりから何かを捨てて行くことにはさわやかな体感がある。そうわかっていてなかなかそれにとりかかれな。とりかかるまでからだに気分が重い重いおもしろくつついているみたいだ。

・手帳：BOOKS DIARY 1972、（4月3日）

寒さとれぬ

○午前分館長室の机の上の片づけ。（片づけは快し）午後下町におりる（文芸時評ののつた毎日新聞買い、マヤの航空券買い、鹿銀で伸三の月謝支払、書店を見て帰る）

連合赤軍に関する週刊誌三冊買う

専修大の福島新吾という教授来て話して行く

政治学、沖縄で新川明に会って来たという。網●●（二字不明瞭ー引用者注）に数日いた。アレキサンドルとヴィクトル神父から手紙

夜TV見、週刊誌など見てすごしてしまう

「手帳：BOOKS DIARY」に記された、「○」は『日の移ろい』に転用した記述を後で島尾がメモしたものである。つまり同じ1972年4月3日の記述でも、これだけの内容が書かれていないということである。とくに、「新川明」の名前が見える、専修大学の政治学者福島新吾に関する記事を『日の移ろい』に活かさなかったということは興味深い。

今後は、上記のような作業を綿密に行い、『日の移ろい』『続日の移ろい』論の構築を急ぐ。1972年を舞台としながら、「沖縄の本土復帰」を描かない『日の移ろい』は、日記に見えてやはり小説であり、その内実について考察してゆきたい。また自筆資料の文字データ化も急がれる。

【注】

- 1 鈴木直子「研究動向 島尾敏雄」『昭和文学研究』48、（2004・3）
- 2 花田俊典「ヤポネシアのはじまりー島尾敏雄の「日本」地図」、『日本文学』（1997・11）
- 3 岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭ー島尾敏雄のま

- なごし』（沖縄タイムス社 1990・11）
- 4 村井紀『南島イデオロギーの発生 柳田国男と植民地主義』（福武書店 1992・4）
 - 5 島尾ミホ・志村有弘編『島尾敏雄事典』（勉誠出版 2000）
 - 6 かがしま近代文学館発行『かがしま近代文学館所蔵資料目録 島尾敏雄特別資料目録』（2016・3）
 - 7 安達原達晴「二つの草稿をめぐりー島尾敏雄『出発は遂に訪れず』」、『近代文学資料研究』創刊号（2015・3）
 - 8 島尾敏雄『琉球文学論』（幻戯書房 2017・5）
 - 9 島尾敏雄・川満信一・岡本恵徳・新川明（司会）「“幻”の座談会『琉球弧とヤポネシア』」、『新沖縄文学』（1987・3）
 - 10 少なくとも同年の『沖縄タイムス』に島尾の文章は掲載されていない、とこれも管見に入るかぎりであるが、述べることができる。
 - 11 『日の移ろい』は『海』に1972年6月号から1976年9月号にかけて、断続的に全35回、連載された小説である。『続日の移ろい』もまた『海』誌上に1977年1月号から1984年5月にかけて、長期の休載をはさみながら連載された。『続日の移ろい』の単行本（中央公論社 1986・8）に付された著者による「後書」によると『海』が休刊したことで、予定より早く終了しているが中絶とはなっていないようだ。
 - 12 もう少し正確にいうならば、『日の移ろい』が1972年4月1日から1973年3月31日まで、『続日の移ろい』が1973年4月1日から同年11月1日までを描いている。注11の「後書」によると、島尾の「心づもり」では1973年3月31日までを描く予定だったことがわかる。
 - 13 内、文藝手帳はスケジュール管理と住所録として使用されていた。「BOOKS DIARY」は記入欄の狭さからか、途中から旅行時、出張時の記録のみ記されるようになる。つまりいわゆる日記はノートに記されたものといえる。またノートの中でも「7」と表記した資料は、内容面から別記されたようにみえる。同じ日記でもバリエーションが存在するのである。さらに「日記抜粋」というノートも存在する。これは、のちになって島尾自身が日記の内容把握を行うためにまとめたものといえる。

【付記】

※本稿は、JSPS科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号16K02413）の成果の一部である

※※本稿で使用した、かがしま近代文学館所蔵資料に関しては遺族である島尾伸三氏に調査、研究への使用許可

を頂いている。また、本稿で例示した新川明氏から島尾に宛てた書簡の内容に関しては、その使用について取材時に新川氏から許可を頂いている。

※※※本稿の執筆に際して、かがしま近代文学館の職員の皆様方に多大なるご助力を賜った。この場を借りて深く感謝申し上げる。

【参考文献】

※注記したものは除く。

安達原達晴「島尾敏雄『日の移ろい』論―「一少女について」（『湘南文学』 2000）

新川明『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房 2000）

岡本恵徳『「沖縄」に生きる思想―岡本恵徳批評集』（未來社 2007）

梯久美子『狂うひと―「死の棘」の妻・島尾ミホ』（新潮社 2016）

花田俊典『沖縄はゴジラか―<反>オリエンタリズム／南島／ヤポネシア―』（花書院 2006）

比嘉加津夫『島尾敏雄』（言視舎 2016）

山本芳明『カネと文学』（新潮社 2013）